

第20回防衛問題セミナー

演題：東日本大震災における自衛隊の活動・任務

第1部 東日本大震災における自衛隊の活動・任務

講師：東北方面総監部政策補佐官 須藤 彰 氏

第2部 東日本大震災の被災地における自衛隊の活動

講師：元陸上自衛隊第12旅団第48普通科連隊長1等陸佐 山崎 倫明 氏

議事 概要

【司会】

定刻となりましたので、ただいまより第20回防衛問題セミナーを開催させていただきます。

まずは、当セミナーを始めるに先立ち、今回の東日本大震災で亡くなられました方々の御冥福をお祈りするため1分間の黙祷を行いたいと思います。

会場の皆様、恐れ入りますがその場で御起立をお願いいたします。

(黙祷)

黙祷を終わります。御着席ください。

ありがとうございました。それでは、主催者を代表いたしまして、北関東防衛局長の鈴木良之（すずき よしゆき）より、開会の挨拶を申し上げます。

【北関東防衛局長 挨拶】

皆様こんばんは、北関東防衛局長の鈴木でございます。

本日は、第20回防衛問題セミナーに御参加いただきましてありがとうございます。主催者を代表いたしまして一言御挨拶させていただきます。

3月11日の東日本大震災は、東北地方の沿岸部を中心に壊滅的な被害を及ぼすなど、大規模かつ甚大な被害をもたらした未曾有の災害でありました。

この大災害に対し、防衛省・自衛隊では、組織発足以来初めて10万人を超える派遣規模の陸海空統合任務部隊を編成して、人命救助、輸送支援、生活支援等の活動を実施して参ったものであります。この統合任務部隊は7月1日に解散し、今回の大規模派遣も8月31日を以て終了しましたが、現在も、福島県において一部救援活動が続けられているところです。

北関東防衛局におきましても、震災発生直後に災害対策本部を設置し、各施設の被害状況の調査、被災地への支援要員の派遣等を実施して参りました。

本日のセミナーでは、被災地の最前線にあって、防衛本省と現地統合任務部隊を繋ぐ役目を担った、東北方面総監部須藤彰政策補佐官に、「東日本大震災における自衛隊の活動と任務」について、福島県南相馬市で瓦礫除去等の任務の指揮を執られた、元陸上自衛隊第12旅団第48普通科連隊長山崎倫明1等陸佐に、「東日本大震災の被災地における自衛隊の活動」について講演していただくことといたしました。現地で実際に指揮を執られたお二人の貴重なお話をどうぞお聞きください。

限られた時間ではございますが、本日のセミナーを通じ、防衛省・自衛隊の活動・任

務を御理解頂きまして、今後、防衛省・自衛隊に対し、より一層の御理解・御協力をお願いしたいと思っております。

最後になりますが、今回セミナーを開催するに当たり御協力いただきました関係各位に対し、この場をお借りしまして御礼申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

【司会】

お待たせいたしました。

それでは、東北方面総監部 須藤 彰（すどう あきら）政策補佐官より、東日本大震災における自衛隊の活動・任務について、御講演をいただきます。

皆様、拍手でお迎え下さい。

【第1部 須藤彰東北方面総監部政策補佐官】

皆様、おばんです。

これは東北地方で「今晚は」という意味です。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。私の方からは、この東日本大震災における自衛隊の活動と任務について、これからお話をさせていただきます。自己紹介を兼ねまして、少し説明をさせていただきます。

今回の震災対処では、「10万人体制」について様々な報道があったと思いますが、ちょうど画面の表のように、防衛大臣の下にJTF、これはJoint Task Force、統合任務部隊のことで、災害では初めて陸海空の自衛隊が一人の指揮官の下で行動することになりました。

この表にあります陸上自衛隊の東北方面総監、君塚陸将が災統合任務部隊の指揮官になりました。この指揮官の下に、最も多いときで、陸上自衛隊ではだいたい7万人、海上自衛隊は約1.4万人、航空自衛隊は約2.2万人。また、日本側の指揮下にはありませんが、共同で活動する部隊として、だいたい1.6万人の米軍も活動していました。

それで、私の位置づけを申しますと、この表にある司令部の中で、指揮官の下に各官官があります。その中のちょうど赤く塗った部分、これが政策補佐官です。私の仕事は何かといいますと、普段ですと、自治体や国の出先機関などと連絡調整を行うことです。

それから今回の災害では、もう一つ、司令部としても、現場の情報をいち早く知らないといけません。司令部には、部隊から詳細な報告が上がってきますが、まずは連隊で、その次に旅団あるいは師団で、それぞれの隷下部隊の報告をまとめて、最後に司令部に報告が来ますので、どうしても時間がかかってしまいます。

今回のように被害が大きく、被災者のニーズも刻々と変わっていく。それに対応する部隊も必要な装備などが変わっていきます。そうしますと、少し時間が経った後で正確な報告を受けるだけでなく、多少の偏りはあるかもしれないが、現場の雰囲気や悩んでいる問題などを、すぐに司令部としても把握しようということになりました。

そこで政策補佐官の私、今日はここに来ていませんが、私の指導官的存在である法務官の近藤一佐、この二人が実際に現地を見て、いろいろと気になったことを報告することになりました。例えば防衛部長とか情報部長は、細部の説明を聞かなくても、皆さんはその名称を聞いただけで、この人たちは一瞬たりとも司令部を抜け出すことはできな

いだろうと想像がつくと思います。逆に、政策補佐官や法務官であれば、決して暇だというわけではないのですが、少くくは不在にしても大丈夫だろう。おそらく指揮官もそうお考えになって、放し飼いのように現場へ向かわせてくれたのだと思います。

今日は、災害派遣中、ほぼ毎日現場をまわっていた中で、私が感じたことなどを報告していきたいと考えています。

余談になりますが、私は今、迷彩服を着ていますが、身分上は事務官です。防衛省では、背広組と制服組があると聞いたことがある方もいると思います。さらに世間では、お互いに仲が悪いとまで言われています。これは余計な話ですが、この2つの分類でいくと、私は背広組になります。もっとも、この格好で「背広組の須藤です。」と言っても、非常に分かりづらいし、何の冗談かと思われてしまうのですけれども・・・。災害派遣中は、被災地をスーツで歩くわけにもいきませんので、ずっとこの迷彩服を着ていました。最初のうちはこの半長靴が窮屈だと思うこともありましたが、習慣なのか、いまは迷彩服にすっかり慣れて、普段もこの格好をしています。

したがいまして、いつものように、この格好で、本日は講演をいたします。まず、説明に入る前に、東北方面総監部で今回の災害派遣をビデオにまとめましたので、こちらをご覧ください。

(ビデオ放送)

それでは、これから資料を使いまして、説明をしていきます。

まず今回の震災の特性です。今回は津波の被害が非常に大きかったことが特徴です。地震については、宮城県沖の地震が30年以内に、99.9%起こると予想されていたためだと思えますが、今回、被災地をまわっていても、地震で倒壊した建物はほとんどありませんでした。その一方で、津波の被害は本当に大きかった。たとえば、ヘリコプターで被災地を見ますと、家が海に流されていて、海の中に住宅街があるかのような、そういう錯覚が起きるくらい大きな被害でした。

今回の震災は、被害が広域で甚大でもありました。周知のように、大きな被害が三県に及んでいます。この場合、人命救助も、行方不明者の捜索も、生活支援も、どうしても多くの人手と物資が必要になります。

原発については除染の支援など、今も活動を続けています。津波と原発の複合事態、これも今回の震災の大きな特徴です。

それから地方自治体の機能喪失ということもあります。災害対処の大まかな枠組を説明しますと、災害については、法律上、地方自治体、それも住民に最も近い立場にある基礎自治体の市町村が中心となって対応することとなっています。したがいまして、我々の自衛隊も災害派遣を行います。これは原則として、都道府県知事からの要請を受けて行うことになっています。つまり、災害対処の基本は地方自治体というわけです。

このような枠組になっていますから、例えば救援物資です、今回の震災では全国から被災地に送ってもらいましたが、この宛先は県になっていまして、そこから各市町村宛に物資が配分されることになっています。当然、自治体名義の物資ですから、自衛隊は断りなしに勝手に配ることはできない。今回、場所によっては、倉庫には物資が豊富に

ある、もう少し踏み込んで言えば、倉庫が物資であふれている。それでも、これからお話しするように、様々な事情がありまして、自衛隊が配ろうとしても、自治体が「うん」と言ってくれない。結局、自衛隊としても、配りたくても配れない。このように、被災者にとっても、我々自衛隊にとっても、つらい状況となることもありました。

ここで、多くの方が誤解されていると思うのですが、機能不全というのは、自治体の庁舎や職員に被害が発生する、つまり、いつもと全く違う状況になってしまったから機能しない。こう考えている方が多いと思います。報道などでも、概ねこのようなトーンになっています。

しかし、実際に、津波が来て庁舎が流されてしまった、町長も亡くなってしまった、もっと言えば、「長」のつく職員の多くが亡くなってしまった岩手県の大槌町はどうか。全くの機能不全か、というと、全然違います。本当に意外ですが、実際に現場をまわってみると、大槌町は非常に上手く対応しています。幹部が被害を受けていますから、ここに残っているのは担当ばかりです。しかし、だからこそ、もうここは自分たちでやらないといけないと、非常に機敏に、高い意識をもって、職員は動いていました。横で見ていると、表現が適切ではないかもしれませんが、まるで文化祭の準備をしているように、みんな支えあって、励ましあいながら、本当に必死で頑張っていました。

同様に、岩手県の陸前高田市はどうか。市長はなんとか助かりましたが、幹部の多くが亡くなり、庁舎も流されてしまいました。宮城県の南三陸町も同じような被害です。それではこの二つの市町は機能不全かと言えば、やはり違う。こちらも非常に動きが良いわけです。正確な言い方は忘れてしまいましたが、経営学で中間結節点を無くしてフラットな組織を作ると、意思の疎通が速くなって判断がスムーズにいくという考え方があったと思いますが、正にそのとおりです。町長が何か指示を出す、あるいは市長が指示を出す。イメージとしては、首長と担当しかいませんので、これがすぐに担当に伝わるわけです。自衛隊側も担当に「こういうことをやってほしい」「ああいうことをやってほしい」とお願いしますが、これもすぐ町長に話が伝わる。私は決して間にいる幹部が邪魔だと言っているわけではありませんが、組織の中での意思疎通と意思決定が早いのは確かです。

他方、これまた意外なのですが、実際に現場にいますと、庁舎もしっかり残っている、幹部にも被害がない、要するに普通、今までどおりの自治体ですが、こういうところに限って、機能しないのです。

例えば、言い出したらキリがありませんが、避難所の学校のプールに津波で押し上げられたヘドロが溜まっている場合。夏を迎えるにつれて、衛生的に非常に問題となりますので、これを片付けないといけない。バキュームカーがあればいいのですが、自衛隊にはそういう車両は無いものですから、そこは自治体をお願いをするわけです。そうすると、自治体の中でケンカが始まるわけです。これは衛生上の問題だから、衛生部局が対応しないとイケない。いやいや、ヘドロは産業廃棄物に当たります。したがって、この担当は環境部局でしょうと。そうかと思うと、そのヘドロがあるのは避難所に指定された学校だから、これは教育部局が担当するのが筋だ。何を言っているのですか、これは災害が原因でヘドロが溜まったのですよ、となれば、防災部局の仕事ではないですか、とお互いに主張しあって、話が先に進みません。

それから瓦礫の捨て場です。地元の新聞には、各自治体ともに、瓦礫の集積場がなくて困っていると書かれていましたが、実際、被災地をまわっていると、集積場自体はそれなりにあるのです。そこで、自治体の人にも忙しいから、ひょっとしたら気づいていないのかもしれないと「あそこの集積場はスペースが相当にありますよ」と教えてあげますと、「分かってないな、この人は」という表情で、「いやいや、あれは道路課の捨て場なんですよ」「環境部はあそこに捨ててはいけませんよ」と、話はかなり複雑です。自衛隊もとにかく早く片づけたいので、スペースがあれば、当然ですが、そこへ捨てようとしています。そうすると、集積場に管理人のような人がおかれていて「自衛隊さんは、あっちに行ってもらわないと困ります」「ここは環境部の集積場になっています」と言われて、Uターンしたり、作業している場所から離れた集積場まで運び込まないといけないわけです。おそらく各部ごとに予算をとっているからだと思うのですが、瓦礫を片づけるという観点からは、作業のスピードが落ちてしまうのは確かです。

これまでは組織の中の縦割りの話でしたが、自治体職員個々の習性も問題になります。同じ役人として、自分自身を反省してみると、これは自治体職員に限らず、国の役人も含めた共通の問題かもしれません。

具体的には、救援物資の配分です。震災後から、全国各地から被災地へ多くの救援物資を送っていただきました。これは県から市町村の集積場へと運び込まれて、被災者の元へは、そこから配送されることになります。震災直後は物資が不足していますので、とにかく早く配らないといけない。しかし、携帯電話は繋がらない、避難所に出向いて直接連絡をとるにしても、道路も塞がっていますから、正確な情報はタイムリーには入ってきません。そもそも避難所そのものが混乱してしまっていて、少しでも住環境をよくしよう、食糧を確保しよう、屋内を暖めようと係員も必死ですし、着の身着のまま避難所に入って来る人がたくさんいれば、家族を探そう、自分の家の状況を確認しようと、避難所から出て行く人もたくさんいます。そうしますと、どんなに頑張って情報を集めても、「だいたい」しかわからないわけです。それでも、最初のうちは、連絡がとれないところもありましたから「あそこの避難所には100人くらいいるだろう」程度でも、情報が入れば上出来です。

そのような情報が入ってきますと、我々の感覚では、それでは150人分、あるいは200人分、いずれにしても、予想される人数分よりも多めに物資を持って行って、早く配ろうと考えます。しかし、これは自戒も兼ねて言いますが、やはり役人の性質、悲しい性なのかもしれませんが、「絶対に間違っただけいけない」と考えますので、自治体の職員からは、「『100人くらい』では困りますよ」と。「正確には95人なのか105人なのか、そこをハッキリしてほしい」「いい加減に物資は配れません」と言われてしまいます。先ほども申しましたように、救援物資の宛先は市町村になりますから、自衛隊の一存では勝手に配れません。こう言われてしまうと、配りたくても配れなくなってしまいます。「非常時に、律儀にそんなことを言っていたら、話が先に進みません。助かる命も助かりませんよ」と説得しても聞く耳をもちません。

どうしてこんなに頭が固いのか、と悩んでしまいましたが、自分の経験から考えますと、役人の生活からは切っても切り離せない予算。これを扱う際には、こういう姿勢が求められます。予算、つまりは国民の皆様の税金ですから、一円たりとも無駄に使って

はいけない。まずは必要な情報をしっかりと集めて、何が必要かを考える。それが決まると、今度は関係者に入念に根回しをする。要求どおり予算がもらえたら、執行も間違いなく無駄なく行わないといけません。平素、優秀な役人とは、絶対に間違いをしない人です。また関係者に気配りして、しっかりと根回しを行える人です。ただ、その習性で、救援物資を正確に配ろうすると、時間ばかり経ってしまって、どんどん物が腐っていくのですね。

少し長い説明になりましたが、自治体の機能不全、これは物がなくなったとか、人がいなくなって機能しないというよりも、平素の体制を非常時にもそのまま続けるために機能しない。有事には有事なりの考え方があると思いますが、その切り替えが上手くできない。そのために機能不全になってしまうのです。これも繰り返しになりますが、災害対応では、自衛隊は自治体の采配の下で活動しますので、対応の良い自治体の下にいる自衛隊は動きが良いわけですね。逆に動きが鈍い自治体の下にいる自衛隊は動きが悪くなってしまいます。そのため、今回の災害では、自治体によって、対応にバラツキが出てしまいました。

話を変えまして、資料の青字の部分です。今回の災害では、災害派遣では初の統合任務部隊が組織されまして、皆さんご存知のように、10万人体制で対応しました。また、実際の任務で、日米共同で対応したのもこれが初めてです。

また、大地震への対応の他に、原発への対応もありました。我々の表現では、「二面対応」になりますが、これも初めての経験です。

それから、自衛隊は「最後の砦」という強い気持ちをもって、今回、我々は任務に当たりました。少し力んだ表現となりますが、たとえば、小さな町村も必死で対応していましたが、自分たちで対応できない場合には、県や国にお願いすることができます。しかし、自衛隊は、自分たちが対応できない場合、もう誰にも頼む人がいません。サッカーでも、フォワードが抜かれてしまっても、まだバックスが控えていますから大丈夫です。しかし、ゴールキーパーが抜かれれば、必ず点を取られてしまいます。今回の災害で、指揮官の君塚総監から「我々はゴールキーパーだ」という話があったのは、そのためです。そして、「いま、この場所で任務に当たることを天命だと思って大いに意気を感じよう」「我々自衛隊が、いまここで頑張らないで、いつ頑張るのか」と檄を受けました。被災者のために、自衛隊の存在意義をかけて、強い気持ちで災害に臨みました。

次の資料をお願いします。今度は実績です。

人命救助です。ご覧のように、3月11日から26日の間に約2万人の方を自衛隊が救助しております。ピークは3月13日で約5千人を救出しております。後ほど説明しますが、3月13日、この数字は重要です。

ご遺体の収容は、最終的に約1万人の方を自衛隊が収容しました。ご遺体のうち、だいたい6割を占めます。

医療支援です。先程のビデオにもありましたが、今回は避難所生活が長くなりましたので、体調を悪くされる方も多くなりました。また、春先でもありましたので、花粉症もありまして、だいたい2万3千人の方を自衛隊の医官が診察しています。

次の資料をお願いします。続きましては、生活支援です。

まず給水ですが、累計でおよそ3万トンの支援を行いました。グラフをご覧になっていただきますと、ごく初期の段階では低く、徐々に上がって行って、水道の復旧に連れて、またグラフが下がっていきます。

続きまして、給食と入浴の支援です。給水のグラフと同じように、これも少しずつ上がって、避難者の数が減るに連れて、また下がっていきます。入浴の方は、施設の準備に少し時間がかかりますし、また代替となる施設がなかなかありませんので、全体的に緩やかなグラフになっていますが、これも少しずつ上がって、徐々に下がっていきます。

いまグラフをご覧になっていただきましたが、給水や給食の支援も、ごく初期の段階では低調ですが、3日目以降、特に1週間を過ぎた頃から数がどんどん増えていきます。その理由として、自衛隊の方でも、相応の準備期間が必要ということがあります。特に、今回のように、道路が寸断されているような場合には、被災地へ行きたくても、車両が前に進みません。

ただ、それ以上に、災害時の部隊運用の基本として、やはり初動では人命救助に集中する必要があります。よく人命救助は最初の72時間が大切と言われています。これは容易に想像がつくと思いますが、飲まず食わずで、雪が降っている中で、瓦礫の下に埋もれている。そうしますと、長時間、そこで耐え忍ぶことは難しくなります。したがって、自衛隊も、当然のことながら、助けられる命は何としても助けたい、一人でも多くの方を救助したいと考えまして、人命救助に主力を注ぎます。自衛隊の人員も装備も無尽蔵にあれば、何も悩む必要はありませんが、資源は限られています。そうすると、初動の段階では、どうしても生活支援は必要最小限ということになってしまいます。各種の報道で、避難所によっては1日1個しかおにぎりが無い、とてもひもじい、そのような話がありました。「自衛隊は気づいていないのか、何をやっているんだ」と怒られたこともあります。我々もそういう状況は痛いほど分かっていました。それでも、大変厳しいことを言いますし、おまえは鬼かと言われても仕方ありませんが、あの状況下では、「おにぎりが1日1個でひもじい」、そう言えるだけ、まだ幸せな方だと思うのです。現に瓦礫の下に埋もれて、声すら上げることができない人もたくさんいるわけですから。そういう人たちが無数にいることを考えれば、我々も大変つらかったのですが、初動の段階では、やはり人命救助を優先させる必要がありました。今回の災害では、発災から1週間が経過した3月18日に、君塚総監が会見を開きまして、活動の重点を徐々に人命救助から生活支援に移すことを表明しました。それ以降、グラフのように生活支援が本格化しています。

これらのことを踏まえまして、災害では、昔からよく言われている「自助、共助、公助」、つまり、自分で自分を助ける自助、ご近所同士などお互いに助け合う共助、自衛隊などが助ける公助ですけれども、このバランスがとても大切になります。特に、最初の段階では自衛隊は人命救助が中心となりますので、自助や共助で、例えば備蓄を3日分でも準備してもらいますと、いざという時に、避難所での生活の質がもう少し良くなると思います。

次の資料をお願いします。

これは、今までの災害派遣活動の経過をまとめたものです。いま説明しましたように、最初はやはり人命救助です。段々、図の矢印が太くなっていくのは、初期の段階では、

東北方面隊の9師団と6師団、この二つの師団を中心に活動しましたが、全国から続々と応援の部隊が駆けつけたからです。これもまた説明したとおり、初動では、人命救助に集中する分、生活支援は必要最小限となりますが、一週間くらい経過しますと、部隊の数も増えてきますし、活動の重点が生活支援に移っていきますので、図の矢印が太くなっていきます。また時間が経つに連れて、応急復旧、例えば壊れている橋の代わりに自衛隊の機材を使って仮の橋を架ける、瓦礫で埋もれた道路を啓開する、そのような作業も本格化していきます。

次の資料をお願いします。

これは活動時の写真です。初期の段階では、道が瓦礫で埋もれ、あるいは冠水していますので、このようにヘリコプターを使って救助もしました。地盤沈下もしまして、冠水が広範囲に及んだため、このようにボートによる救助も行いました。写真にはありませんが、水深がそれほどでもないところは、一刻を争うということで、いま私が来ているこの迷彩服で、そのまま救助に向かう隊員もいました。3月の東北は寒いですし、乾かす暇もなく作業を続けますので、隊員は大変な状況の中で活動していました。

こちらは患者の搬送です。場所は石巻市の総合運動公園です。

次の資料をお願いします。

これは行方不明者の捜索を行っているところです。石巻市の釜谷地区、頻りに報道されていますので、ご存知の方もいると思いますが、全校児童108人中、約7割の児童が亡くなられた大川小学校で捜索を行っています。写真では、まだ冠水していますが、国土交通省にお願いしてポンプ車で水を抜いてもらいましたので、これでも相当水は引いています。

この写真は海上自衛隊の捜索活動です。このように家がそのままの形で海へ流れていきますので、ダイバーが潜って屋内を探します。海上自衛隊の人からも話を聞きましたが、注意しないと、家の屋根などに絡まって、外へ出られなくなってしまいます。

この写真は航空自衛隊の捜索活動です。航空自衛隊といえば、戦闘機など、空を飛んでいるイメージがありますが、松島基地も含めて、その一帯が被災していますので、陸上自衛隊と同じように、手作業で瓦礫を片づけながら行方不明者を捜索しています。これには基地の近くの住民の人たちも驚いたようです。「陸の上のカップ」と、微妙な表現を使っている方もいましたが、「基地があると騒音で迷惑だ」と日頃は思っているが、今回ばかりは「近くに基地があって良かった」と言ってもらえて、嬉しかったです。

次の資料をお願いします。

こちらは瓦礫の除去をしているところです。発災当初、道路はこのようになっていました。まるで終戦直後の廃墟のように、瓦礫に埋もれていますが、最終的にはこのように綺麗になっています。

こちらは大川小学校です。ここは押し波で学校の中の物が流されて、引き波で車のタイヤなど、いろいろなものが学校に入り込んでいます。校舎の中では重機は使えませんので、手作業で一つひとつ片づけて、最終的には校舎の中に何もない状態にしています。当初は、ここまできれいに片づけることは考えていませんでした。でも、行方不明者の捜索活動では、そこに誰もいないことを確認しながら、瓦礫を片隅に寄せていくのですが、そうしますと、やはりお子さんの行方が分からないご家族の方は、どうして

も気になってしまうわけです。そこに瓦礫が残っている。自衛隊の方で、ここはしっかり捜索して、お子さんはいませんでしたよと説明するのですが、その瓦礫を見ると、ご家族の方は、ひょっとしたらその下に自分の子供が居るのではないかと、気になってしまうようです。私も2人の子供の父親なので、やはり同じ立場であれば、頭では分かっても、気持ちがどうしても納得できないと思うのです。現場にいますと、そのようなご家族の強い気持ちが痛いほどよく分かりますので、「行方不明者の捜索」の内容を広く考えまして、校舎の中をきれいに片づけるようにしたところです。

次の資料をお願いします。

こちらは原発周囲20キロ圏内の行方不明者の捜索活動です。ここは空挺団が活動しましたが、やはり徹底的に片づけることにしています。というのは、ここは他の津波被害があった場所とは性格が違うのです。つまり、一般の方は入れないところなのです。たとえそこに自分の家であっても入れない。入れるのは、自衛隊や警察など、ごく一部です。そこで、まずは他の場所と同じように、ご覧のように道路を啓開します。次に、目視で行方不明者を探します。その後、部隊ごとに担当する場所を区切りまして、瓦礫を片づけながら、集中的に捜索をしていきます。残った家屋の中も捜索します。ここまでは他の場所とほぼ同じ手順なのですが、20キロ圏内では、家屋の中の瓦礫の片づけと清掃もしています。いま申しましたように、住民の方は立ち入れませんので、自分の家がどのようになってしまったか、心配されています。また、瓦礫で埋もれた家の中を片づけたくても、片づけることができません。その思いを受けまして、少しでも住民の方が安心できるようにと、我々の方で片づけをしまして、家の状況が分かるように、写真を撮って、住民の方に報告をいたしました。

こちらは側溝の中に潜り込みまして、捜索をしているところです。なんでこんな所を？と思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、悲しい話ですが、こういう狭い所に小さなお子さんが流されてしまうことが少なからずありますので、本当に隅々まで、しっかりと捜索を行ったところです。

次の資料をお願いします。

これは生活支援の様子です。こちらは給水、こちらは入浴です。これは炊事車と言います。この車で調理をすることができます。皆さんも、お昼の時間にオフィス街などで、大きな車が止まっていて、そこでカレーなどを作って売っているのをご覧になったことがあるかもしれません。当然、自衛隊はお金はいただきませんが、この炊事車を使って炊き出しをしています。暖かい食べ物、我々は「温食」と呼んでいますが、これは数に限りがありますし、被災者の中には、まだ温食を口にすることができない方もいますので、隊員の方はご覧のようにおいしそうな食事を作っていますが、自分たちは缶飯と言いまして、缶詰に入ったご飯、それに同じように缶詰に入った沢庵などを毎日食べていました。私もしばらくの間は缶飯を食べていました。「意外と」と言うと、怒られてしまうのですが、しっかり味付けがしてあって、最初のうちは本当においしく食べることができます。ただ、これを続けていくと、やはり飽きてしまいます。私は発見したのですが、缶飯には、五目飯とか鶏飯とか、複数の種類があるのですが、味付けはみんな同じなのですね。なので、一応、メニューは毎日変わっているのですが、これを毎食続けますと、どうしてもつらくなります。「打ち止め」「伸び悩み」という表現を使ってい

ましたが、私の場合は、だいたい一週間位で、この状態になってしまいました。ただし、まだ「食べたくない」とわがままを言っているうちはいいのですが、栄養に少し偏りがあるのか、ストレスが原因なのか、ひどい口内炎が出来る隊員もいまして、そうなりますと、痛くて食べるができなくなってしまいます。缶飯は塩味が強いので、特にしみてしまうようです。隊員は声が大きい人が多いのですが、その中でも「あの人の声はでかい」と言われている人が、今日はやけに静かで変だなと思うと、この口内炎が出来ていて、つらくて口を開けられないという話もありました。本当は温かい御飯を食べることができればいいのですが、なかなか難しい場合もありますから、今回の教訓を踏まえまして、今後は少なくともビタミン剤、調べてみますと、これを飲んでいた隊員は口内炎を防げたようなので、せめてこれだけでも用意できるように、いま準備を進めているところです。食べ物話になりますと、つつい時間を忘れて話をしてしまうのですが、このままでは缶飯の話だけで終わってしまいますので、次の話に移ります。

こちらは入浴支援です。この写真では、自衛隊の入浴施設を使っていますが、場所によっては、例えば、ボートを使って、これは文字どおりの「湯船」になりますが、そこにお湯を張ってお風呂にする。またさっき映像に少し出てきましたが、化学防護車と言いまして、本来は放射線を浴びたときなどに手足などを除染、つまり洗うために使いますが、その点ではシャワーと同じですから、これを使いまして、被災者の皆さんにシャワーの提供をしていた部隊もありました。自衛隊の入浴施設は、数が限られていますので、多くの方に、少しでも快適な生活を送ってもらえるよう、様々なアイデアを出し合ったところでは。

次の資料をお願いします。

これは施設部隊です。先ほども説明しましたが、まずは手作業で瓦礫をどけながら、行方不明者を捜索しますが、そこに誰もいないことが確認できましたら、写真のように、重機を使って、道を啓開します。架橋は映像にも出てきましたけれども、これは45号線、三陸沖を走る幹線道路です、これが南三陸町で落ちてしまいましたので、施設部隊が臨時の橋を架けています。また、この写真にあります重機は「グラップル」と呼びます。マジックハンドのような大きい「つまみ」がついていまして、これを使って瓦礫を一つずつ片づけていきます。ブルドーザを使えば、作業は早くなりますが、万一そこに行方不明者がいた場合、大変なことになってしまいますので、このように重機を使っても丁寧に瓦礫を片づけていきます。

重機についての話になりましたが、自衛隊はそれほど多くの機材を持ってはいません。したがいまして、今回は、市町村の方で予算を取っていただいて、重機をリースしてもらいました。そうしますと、対応が早い市町村は、すぐに重機を、しかも大量にリースしてくれます。逆に対応が遅いところは、いつまで経っても重機を確保してくれない。重機がなければ、自衛隊は手作業で片づけを続けるほかありません。自治体によって、復旧作業に大きな差が出てくるのは、このような事情があります。

次の資料をお願いします。

こちらは瓦礫の除去を行う際の、自治体での調整風景です。瓦礫を片づける権限も予算も、自治体がもっています。そのため、自衛隊側から、まずここから片づけたらどうでしょうか、その場合には、こういう重機を使ってはどうでしょうかと、毎日の会議の

中で、働きかけたりしています。こちらは、民間業者の方と一緒に作業をしているところです。今回の震災では、地元の建設業者も大きな被害を受けていますが、本当に有難かったのは、自分の会社が大変なことになっているにもかかわらず、まずは地域の復興だ、地域のために恩返ししたいと、わずかに残った重機を持って、集まって来てくれたことです。中には、1台しか残っていないけど・・・と申し訳なさそうに、支援に来てくれた業者もいましたが、本当に1台でも多くの重機、それから機械だけでは勝手に動いてくれません、それを動かすオペレーター、これを1人でも多く必要としていましたので、助かりましたね。そして、それ以上に、こういう心意気が何よりも嬉しい。隊員も、集まった業者の人たちも、自分ができることは何でもしたいと強い思いをもっています。お互いの強い思いを確認できると、士気がとても上がります。また、地元の業者は、やはり地元のことをよくご存知ですから、その知恵を借りて、作業効率を高めることができました。この写真では、集まってもらった業社の人たちに、同じ会社であれば、上司が指示をすればいいのですが、各社から集まっていますので、自衛隊が音頭をとっている、これを我々は「作業統制」と呼んでいます、それを行っているところです。

次の資料をお願いします。

これは救援物資を輸送しているところです。今回、全国から被災地に向けて、多くの物資を送っていただきました。こちらは航空自衛隊が大型輸送機を使って物資を運んでいます。これは海上自衛隊が艦艇を使って運んでいるところです。これは陸上自衛隊が車両を使って運んでいるところです。

次の資料をお願いします。

これは救援物資の仕分けをしているところです。日本国内だけでなく、世界各国からも、貴重な物資をいただきました。これは自治体が受け取って、被災者へ配ることになりますが、たとえば、ダンボール箱に「下着」「衣類」と書かれて送られてきても、その中に、具体的に何が入っているのか、分かりません。衣類、だいたいがトレーニングウェアでしたが、これが大人用なのか子供用なのか、あるいは男性用なのか女性用なのか、サイズはどうなのか。この辺の基本的な情報がないと、なかなか配れませんので、この写真のように、部隊が物資の集積場になっている倉庫などへ出向きまして、いただいた物資を配りやすいように仕分けしているところです。

また、こちらはカタログを作っているところです。これは買い物をすると分かりますが、お店に行きますと、あらかじめ自分が欲しいと思っていたものだけでなく、そこに置いてあるのをみて、こういう物が欲しいな、と気づくことがあります。この写真は靴のカタログになっています。たとえば、発災当初に避難所で長靴をもらい、そのままずっとそれを履いていた人もいましたが、そういう人がこのカタログを見ると、「そうか、靴をもらえることもできるのか」と気づけば、夏場に蒸れる長靴で我慢しなくても、靴をもらうことができるわけです。

ご覧のように女性隊員も活躍しています。ここでは下着の写真は出ていませんが、今回、下着もたくさん送っていただきました。ただ、女性用の下着は、なかなか男の我々では、恥ずかしいということもありますが、それ以上に種類もたくさんあって、仕分けするのが難しいのです。そこで女性の隊員がこのように作業をしていました。

女性の話になりましたので、その点について、もう少し話をしますと、部隊ではどう

しても力仕事が多くなります。そうしますと、男と女、どちらが力が強いかといえば、例外はありますが、総じて男の方が力が強い。そのため、今までは、女性隊員というのは男性隊員の補助的な存在と認識されていた面がありました。しかし、今回の災害では、この仕分けもそうですが、女性にしかできない仕事というのがたくさんありました。

写真にはありませんが、例えば岩手県では、「お話し伺い隊」を作りました。その名のお通り、避難所をまわって、話をひたすら聞くわけです。避難所生活も長くなると、誰でもストレスが溜まってきます。言いたいことはたくさんあるが、相手もないので、なかなか言うことができない。そこで女性隊員が大体5人ぐらいでチームを作って「最近どうですか?」「何か困っていることはありませんか?」と話を聞いてまわります。ただ話を聞くだけか、それじゃあ何も意味が無いじゃないか、と言う人もいます。私も一度、同行したことがあります。実際に避難所で話を聞いてみると、皆さん、本当にたくさん話してくれます。一つの避難所に2時間くらいいるのですが、今まで溜まっていたことを初めて言うことができた、喜んでもらえました。

これは家にいるとよく思うことですが、自分の奥さんと子どもが満足していれば、自分が多少困っていても、父親というのは満足できると思うのです。逆に、奥さんと子どもがイライラしている、困っている、満足していないと、やはりお父さんも、何とかしないといけないと思って、どうしてもカリカリしてしまう。そういうことを考えながら、避難所を回っていましたが、やはりどこでも同じような感じでした。そのため、避難所での生活を少しでも落ち着いたものにするためには、女性と子どもへの気配りが大切になりますが、そういうときに、男性の我々も頑張っているのですが、それでも気づかないところがあります。また、それ以前に、別に何も悪いことはしていないのですが、いかつい男性隊員は、遠慮されて、話しかけてもらえないこともあります。そこで女性隊員が、避難所を回りまして、女性ならではの気配りをする。避難所の人たちも、いかつい男性隊員には話しづらいこと、お願いしづらいことも、女性隊員には言うことができる。それまでは、なんとなくギスギスした雰囲気があった避難所が、女性隊員が何人か入って、話を聞いたり、用をしたりすることで、明るい雰囲気になっていくのです。それを見まして、女性は男性の補助ではなく、女性にしかできないことがたくさんあるのだな、と改めて気づかされたところです。

この写真は配布会のときのものです。発災当初はとにかく物資がなくて困ったのですが、時間が経てきますと、国内外からたくさんの物資を送ってもらったために、物によっては、もったいない話なのですが、余るものも出てきます。それらをお店のようにならべて、お金はいらないのですが、皆さんに選んでいただき、持って帰ってもらう、配布会を開きました。先ほどのカタログもそうですが、今まで欲しいと思いつつも、そういう物資はもらえないと思って黙っている、あるいは毎日が忙しくて自分の身の回りのことを考えている余裕もない、そういう方がたくさんいますので、並んだ物資を前に喜んでもらうことができました。また、配給という形で物資を配る場合、今までは「物をもろう立場でどうも自信がなくなっちゃうな」という人も結構いたのですが、ここではお金は不要ですが、お店のように「お客様」として選んでもらうことになりましたので、震災前の自分を思い出していただくこともできたようです。

次の資料をお願いします。

実際にはこういう事態にはなりませんでしたが、原発周囲20kmから30km圏にいる人は、いつでも避難できるように準備して下さい、ということになっていましたので、自衛隊側も、いつ何が起きても、すぐに20km30km圏内から避難させることができるように準備をしていました。具体的には、お年寄りの方とか病気の方とか、自分では避難することができない方について、ここにありますように、要避難支援者として、自衛隊の方で、どこの地区に誰がいるかをしっかり把握しまして、万一の場合に備えていました。

次の資料をお願いします。

これは態勢移行の手順です。当初は10万人態勢でしたが、徐々に人手から機械へ、つまり、人手で瓦礫を片づける作業から機械で片づける作業へ変わっていきます。そうしますと、必要な人員数も減っていきます。生活支援も、徐々に民間業者が入ってきますので、自衛隊がやらなくてもいい、むしろ自衛隊が頑張ってしまうと、業社の仕事を奪ってしまうことになります。

そのような状況をうけて、自衛隊側も、応援に来た部隊を帰すなど、人員の数を減らしていくわけですが、その際、本当に応援に来た部隊を帰しても問題ないか、捜索活動も生活支援も今までと同じ、あるいはそれ以上の水準を維持できるか、慎重に審査して、態勢移行を行いました。最終的には、指揮官自らが現場に赴き、現地を実際に確認して、「これならばこの応援の部隊を帰しても問題ない」と判断しています。

この写真は、このような手順を経て、応援の部隊が帰っていくときに、住民の方から見送りをしてもらった場面です。普段、迷彩服で歩いていても、なかなか声をかけてもらうことがないものですから、今回、このように親しく声をかけてもらい、見送りをしてもらったのは、本当に嬉しかったです。

次の資料をお願いします。

米軍の活動です。今回、米軍にはいろいろと支援してもらったのですが、大きなところでは、仙台空港の復旧作業があります。仙台空港が使えないと、山形空港や花巻空港など、救援物資を迂回して送らないといけません。米軍の機械力を使いまして、日本の業者と一緒に、クリーンアップ、片づけをしてもらいました。これは学校のクリーンアップです。3月11日に大地震が起きたために、校舎や校庭が瓦礫に埋もれて、4月の新学期を始めることができません。これは機械力とはあまり関係ないのですが、米軍にも人を出してもらって片づけをしてもらいました。表現が難しいのですが、高度な技術力がある、機械力がある、米軍にそういう難度の高い作業をお願いするのはいいとして、とにかく人手さえあれば何とかなるような作業は、お願いしてはいけないのではないかと、相手が怒り出すのではないかと、考えていました。しかし、応援に来てくれた米軍、当初は海兵隊が中心でしたが、本当に気持ちがいい人たちで、「オレたちは日本人を助けるために来た。自分たちにできることは何でもする。日本人のためならば何でもする」と言ってくれまして、快く学校の清掃も引き受けてくれました。この写真のように、シャワーの支援もしてもらいました。

このように避難所で音楽演奏もしてもらいました。写真のように、米軍は観客、ここでは被災者の方たちですが、それと一緒に演奏をします。それに対して、自衛隊は、ステージに立っていい演奏をしようとしています。自衛隊は、とにかくいい演奏をする。

いい結果を出す。それを通じて、被災者に元気を与えようと思います。米軍の場合は、正直たまに音が外れてしまったりするのですが、そういうことは気にしない。このように演壇を降りて、みんなと一緒に楽しもうと思います。それぞれに哲学と言いますか、考え方がありますが、この米軍の考え方は、自衛隊にとって参考になりました。

これは物資の輸送をしてもらっているところです。最初のうちは、米軍との調整がうまくいきませんでした。「何時にここの小学校へ物を送って下さい」とお願いをすると、必ず時間と場所を外すのですね。毎回、間違う。なぜだろう？私の英語が下手なのかと。私も思い当たる節はたくさんありますので、いろいろ反省したのですが、紙に書いてお願いしても、それでも間違える。「いったい米軍はどうなっているんだ」と、米軍の担当に文句を言ったところ、「自分たちはいろいろな国に行って、数多くの生活支援をやっている」と。最近ですと、インドネシアのアチェというところです。それで「ミスター須藤、決められた時間と場所に物を置くと、誰が勝つんだ？若い男に決まっているじゃないか。だから俺たちはわざわざ時間と場所を外している。そうすれば、予定の地点で待っている若い男を出し抜いて、女性や子どもにだって、物をもらえるチャンスが生まれるじゃないか。」と言うわけです。なるほど、そういう考え方をするのか、と感心しました。ただ、皆さんもよくご存知のように、日本人はそういうことはしません。私のいます仙台の東北方面総監部の真ん前に小学校がありまして、そこも避難所になっていました。百聞は一見にしかず、と考えて、そこへ米軍の担当を連れて行ったところ、ちょうど物資を配っているところで、一列にしっかり並んでいます。若い男の人もそうだし、お年寄りも子どももそうです。誰も割り込まず、ましてや力づくで奪ったりなんかするわけもない。子どもにだけは「おまけ」でチョコレートをあげるようになっていまして、それをもらって、子どもたちが喜んでます。その光景を見まして、米軍の担当も「信じられない。これはもうタイタニックの世界だな」と、非常に感心してくれて、それ以降はこちらがお願いすると、ちゃんと決められた時間、決められた場所にしっかり物を届けてくれるようになりました。

我々も米軍の支援に助けられ、自衛隊としても大いに習うところがありましたが、米軍の方も、こういう大変な時ながら、いや、こういう大変な時だからこそ、日本という国の底力を分かってくれたと考えています。「いろいろな国を支援してきたけれども、日本ほどレベルの高い国はない」と非常に感心してくれました。私も日本人として非常に鼻が高い思いをしました。

次の資料をお願いします。

今度は予備自衛官です。予備自衛官というのは、普段社会人として生活していますが、いざ何かあった時に招集を受けまして、実際に活動する人たちです。より詳しく話しますと、この予備自衛官には、即応と予備があるのですが、いずれにしても、予備自衛官が招集されて、実際の任務にあたるのは、これが初めてです。普段は社会人として働いていますので、どうしても体力的には、常備の、一般の隊員には劣りますから、大丈夫かなと少し心配していたのですが、私が見る限り、この写真にあるように、みな一生懸命頑張って、常備と遜色なく、場合によっては、常備よりも活躍していました。特に、東北地方にいる予備自衛官は、被災者でもあるのですね。同じ被災者として、つらい気持ち持ちは痛いほどよく分かりますので、避難所などで、さりげない気配りができるようで、

被災者の方からも、お礼を言われたことがあります。

次の資料をお願いします。

自衛隊の被災状況です。写真のように、自衛隊の隊舎や建物なども結構ダメージを受けています。こちらは多賀城駐屯地です。私のいる仙台駐屯地の近くにありますが、ご覧のように、津波をかぶって冠水しています。松島基地も津波に襲われまして、冠水もしていますし、F-2という戦闘機があるのですが、これも津波を受けて故障してしまいました。

自衛隊の駐屯地などには、燃料や食料などの備蓄があります。今回、警察や消防、自治体などの車両に給油をしています。仙台駐屯地には、普段は使っていませんが、井戸もあります。発電機もありまして、停電になっても、駐屯地では電気を使うことができます。つまり、駐屯地は、地域の防災拠点のようになっています。したがって、これは部内的な話になりますが、今まで我々陸上自衛隊は「駐屯地」、英語でいうと「ステーション」、つまり、ここは仮の住まいです。「基地」つまり「ベース」ではありません。有事の際にはここから出て戦うために、仮の住まいという発想なのですが、実際、今回のように大震災が起きると、ここが災害対処の活動拠点になるわけです。仮の住まいということもあり、今まであまり建物などにはお金をかけて来なかった、もう少し正確に言いますと、予算が逼迫していて、とてもそんな余裕がなかったのですが、これからは、駐屯地の基盤整備にもしっかりと目を配っていかなければいけない、そう教訓事項として考えているところです。

次の資料をお願いします。

今回の震災では、隊員も家が流されたり、家族が行方不明になったり、被害を受けています。しかしながら、非常呼集がかかってしまえば、部隊の中で活動しなければいけない。自分の家族のことが気になって仕方がないが、そこへ行くことができない。目の前の任務を遂行しないといけない。そこで、写真のように、隊友会と言いまして、自衛隊のOBの方が作っている団体ですが、そこをお願いをして、隊員の家族を捜索してもらいました。宮城県沖地震は必ず起きる、と言われていたこともあり、部隊の展開、物資の輸送、また隊員の子どものどうするか等、様々に準備をしてきたつもりでしたが、それでも実際に大地震が起きると、気づいていない問題も生じてきました。隊員の家族の捜索もその一つです。今後、隊員は前線で活動するとして、その隊員の家族をどうするか、その点をもっとしっかり検討していかなければいけない、そう反省しています。

次の資料をお願いします。

これも隊員の家族の問題です。招集がかかった後、隊員の子どもの誰が面倒みるのか。今回は1446に大地震が発生しました。通常の勤務時間中なので、初動はスムーズにいったのですが、同じく子どもが学校に行っている時間でもありましたので、親子ともども大変な思いをした隊員も少なからずいました。私も子どもがいますので、よく分かるのですが、震災が起きると、学校に子どもを引き取りに行かないといけないのですね。しかも、物騒な時代と言いますか、その子の親や親戚でないと、学校は引き渡してくれない。子どもが一人で勝手に帰るわけにもいきません。配偶者が迎えにいければいいのですが、それができないとなると、子どもは学校に足止めになってしまうわけです。電話がつながれば、学校に連絡して対応を相談することもできるのですが、今回のように

電話もつながらなくなり、本当に困ってしまいます。

それから、仕事の合間をなんとか見つけて、やっとのことで子どもを引き取っても、今度はどこへ預けるかが問題になります。東北方面総監部は、それでも先進的な取り組みをしまして、写真のように、試行的に隊員の家族のために子どもの一時預かり支援を検討し、今回の震災でも起ち上げました。しかし、場所はあるけれども、保育士などがいるわけでもない。食べ物も用意されていない。女性隊員の中には、困ってしまって、自分の職場に子供を連れて来て、そこで面倒を見ながら仕事をしていた人もいました。それでも今回のように、災害派遣が長期化しますと、無理が続きませんので、仕方なく、子どもを転校させて、田舎の両親に面倒を見てもらった、そのような話もありました。これらのことを反省事項として、今後、隊員家族の支援を充実できるよう取り組んでいきたいと考えています。

以上で、資料は終わりになります。最後に、いま私が思っていることを述べたいと思います。皆さんは、「自衛隊」あるいは「自衛官」と言うと、どういう人たちをイメージするでしょうか。私がいま東北方面隊には、約2万人の隊員がいます。そのうち約1万5千人、全体の4分の3が陸曹、陸士という隊員で占められています。ビデオや、写真に、最前線でゴム長をつけて水の中に半身を沈めて捜索したり、口内炎を作りながら生活支援を行ったりしたシーンがありましたが、実際にそれを行っていたのが、この陸曹や陸士と言われる人たちです。

では、この陸曹や陸士はどういう人たちかと言いますと、正確に説明すると、複雑になりますので、イメージをもってもらうために、一例を言いますと、まず高校を出ます。そして、自衛隊に入ります。最近是不景気で、その分、公務員の人気が高くなっていますので、希望してもなかなか自衛隊に入れませんが、私の近くにいます陸曹はバブル真只中のときに自衛隊に入っていますので、その頃は、かなり入りやすかったそうです。今では自衛官になるために生まれてきたのではないかと思ってしまうほど、模範的な陸曹になっていますが、高校生時代の写真を見せてもらうと、眉毛がありませんでした。本人は「やんちゃな子でした」と言っていました。こういう子供を世間一般では、「不良」「グレている」と呼ぶのではないかと・・・

話がそれましたが、高校を出て自衛隊に入りますと、まず陸士になります。この段階ではまだ任期制です。一任期が2年間、だいたいこれを2任期務めまして、周囲から「自衛官としての才能がある」と言われる、本人自身も「ここなら自分もやっていけるかな」と思うと、試験を受けまして、陸曹となります。ここでようやく終身雇用となります。もちろん、陸士で辞める人もたくさんいます。今はむしろ、希望しても、陸曹になれない時代になっています。その場合、通常は2任期か3任期を務めて、22歳か24歳で自衛隊を辞めて、地元の会社などに就職します。とても厳しい世界です。

それでは、選ばれた陸曹の方はどうかと言いますと、こちら終身雇用とは言いますが、何歳まで働けるかという、54歳が定年になっています。その後はどうするかというと、54歳で辞めて、自力で仕事を見つけるのはかなり難しいですから、就職援護をいまして、各県に置かれた地方協力本部というところが、就職の斡旋をします。定年後に就職の斡旋、と言いますと、今の時代、すぐに天下りを連想します。実際、事業仕分けでも、そのように指摘されたこともありました。それでは、その実態はどうかと言えば、

東北ですと、景気が悪いこともありまして、月給で手取りにすると約12万円から13万円ぐらいとなっています。もちろん早く定年を迎える自衛官には特別に若年退職手当といまして、60歳までは、毎月になると10万円弱程度の手当をもらうことができます。しかし、それを足しても、手取りにすれば月に20万円前後の給料です。不景気で仕事がない方もたくさんいる時代なので、20万円でも、もらえるだけ幸せと言われれば、そのとおりなのですが、世間で言う公務員のイメージ、公務員は恵まれているというイメージからは、かけ離れていると思います。

最前線で黙々と活動する陸曹や陸士、彼らは何を心の支えにしているかといえば、少なくとも、お金のため、つまり、お金をたくさん稼ぎたいから、という理由ではないはずです。お金をたくさん稼ぎたいのであれば、自衛官以外の選択肢を選ぶのが賢明だと思います。お金ではない。それでは、普段、彼らは何を心の支えにしているかというところ、私が見るに、ちょっと大げさな表現になりけれども、「自衛官としての誇り」だと思うのです。

では、その誇りとはどういうものかと言うと、確かに、「オレが日本を守ってやる」という大きな理想を持っている隊員もいるかもしれませんが、どちらかと言えば、もっと身近なこと、たとえば、自分に与えられた仕事は確実に実行したい、そうすることで仲間の役に立ちたい、そう考えながら、目の前のことにコツコツと取り組んでいるのだと思います。そうして、たとえば、今までよりも車両の操縦がうまくなった、計器の読み方が早くなった、自分は自衛官として成長している、仲間に認めてもらっている、それを励みに、また誇りに思って、日々のつらい訓練に励んでいるのだと思います。

災害派遣が終わりまして、本当に嬉しいことに、いろいろな方から、自衛隊は頑張った、自衛隊に助けてもらったと褒めてもらっています。地元の仙台でも、村井知事をはじめ、多くの方から感謝の言葉をかけられ、慰労会も例年以上に開かれています。また、私自身も今日、このような場に呼んでいただきまして、大変嬉しく、光栄に思っています。自衛隊に限らず、どの組織でも、組織を代表するのは幹部になります。私も総監部では、一応、幹部ということになりますので、今日こうして講演をさせてもらっています。ただ、先ほどのビデオや写真にありましたように、今回の災害派遣で本当につらい現場で黙々と作業に当たったのは、部隊の大半を占める陸曹と陸士になります。今日はここに私が代表で来ていますが、皆さんにはぜひ私の後ろには大勢の陸曹と陸士がいると想像してもらって、彼らの頑張りがなければ、また、その頑張りを支える日々の訓練への真摯な姿勢がなければ、決して自衛隊の災害派遣は成り立たなかったということを理解してもらえると幸いです。

また、今回の災害派遣では、労をねぎらってくれたり、お礼の手紙をもらったり、本当に国民の皆様には、親切にしてもらいました。普段、演習場で訓練をしていても、一般の人の目に触れることはありません。したがって、隊員は、皆さんから、声をかけてもらうことも、手を振ってもらうこともないわけですね。それが災害派遣では、ご家族の目の前で捜索をしたり、被災者の方に生活支援をしますので、多くの接点ができることとなります。

私もそうでしたが、被災地を歩いていると、子供が手を振ってくれるのですね。これが本当に嬉しい。子どもは嘘をつきませんから。災害派遣中、食べたい物を食べること

ができなかった反動からか、最近、食べ過ぎて体重が増えてしまっているのですが、周囲の人は優しいので、「そのズボン、ちょっと縮んだ？」と言ってくれたりします。そんなわけではないのですけども。その点、子どもは正直ですから、「太っている」とはつきり言うわけです。それだけに、子どもからお礼を言われたり、敬礼をされたりすると、本当に嬉しいわけです。我々は、敬礼を受けたら、答礼、そのお返しをしないとイケません。これを忘れると、欠礼と言いまして、つまり、失礼になります。そのため、駐屯地の中に入りますと、欠礼をしてはいけないといつも緊張しているのですが、今回は被災地で、子どもたちに欠礼はしないかと心配するほど、みんなから敬礼をしてもらいました。

隊員も、いかつい身体で、一日中水に浸かりながら作業をしている。東北気質なのか、黙々と表情も変えずに作業を続けています。それが子どもたちから手紙をもらう。まだ字を覚えてで、「自衛隊」が「じえーたい」と書いてあったりします。その「じえーたいさん、ありがと」と幼い字で書いてある手紙を見て、驚くことに、この屈強な隊員たちが、本当にポロポロと大粒の涙を流して、それを読むのです。いま述べましたように、陸曹も陸士も、決して恵まれた環境とはいえない中で、自分なりに誇りをもって訓練に励んでいます。そして、今回の災害派遣に臨んでいます。ただ、自分自身の中での心の整理とは別に、こうやって一般の人に感謝してもらえる、自分自身がやっていること、またやってきたことは、決して無ではないのだな、つらいけれど、それでも自衛隊にいて良かったなと思えたことは、彼らの自衛官人生の中で、かけがえのない経験になったと思います。

予定よりもかなり長い話になってしまいましたが、最後に、大変な状況ではありましたが、隊員に心からの励ましをしていただいた国民の皆様、今ここにはいない隊員に代わりまして、お礼を述べさせていただき、講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】

須藤政策補佐官ありがとうございました。須藤政策補佐官に対するご質問につきましては第2部の講演の後、質疑応答の時間を設け併せてお受けいたしますのでよろしくお願い申し上げます。皆様今一度盛大な拍手をお願いいたします。

(館内拍手)

それでは、元陸上自衛隊第12旅団第48普通科連隊長 山崎倫明1等陸佐より、「東日本大震災の被災地における自衛隊の活動について」ご講演をいただきます。皆様拍手でお迎え下さい。

【第2部 山崎倫明元陸自第12旅団第48普通科連隊長】

こんばんは。山崎です。震災当時、私は紹介にありましたように、群馬県にいます第12旅団の第48普通科連隊長ということで災害派遣に参加をいたしました。紹介にありましたようにすでに定年になりまして、先ほど須藤さんが「自衛隊定年になって仕事がない人がたくさんいる」と言っていましたけど、その仕事のない一人です。はい。

須藤さんは東北3県をまわって現地をつぶさにご覧になって、非常に詳しい話しをされました。被災地における自衛隊の活動ほとんど話しをされてしまったので、私は何を話したらいいのかと今思っているのですが、私の経験した範囲の中のお話をしたいと思っております。

48普通科連隊というのは500人ぐらいの部隊なのです。10万人の災害派遣でしたので、その200分の1。本当の非常に断片的な部分しか見ておりませんが、現地での活動の一端をご紹介したいと考えております。

12旅団というのは、北関東と信越、栃木、群馬、新潟、長野この4県を担当する旅団です。被災地に在るわけではありませんが、被災地の外から駆けつけた部隊であります。北海道から沖縄までの部隊が東北に派遣されたのですが、遠いところは数日かかってやって来ていますけど、群馬は非常に東北に近い、「中には群馬県は東北だろう」と勘違いしている人もいらっしゃるぐらいの東北に縁のあるところなものですから、すぐに駆けつけました。

福島県に隣接する群馬、栃木、新潟は、非常に近いということで、3月11日の夕方には派遣準備完了して、すぐに出発して、日付が変わる頃には福島県に入っておりました。もともとこの12旅団というのは、宮城県沖の地震があった場合は宮城県の北部に派遣されるという計画があったんですけども、今回あまりに大きな災害があって、福島県を担当しておりました6師団の部隊もすべて宮城の方に行ってしまうと、「隣の県にある12旅団は福島県に入りなさい」ということで、12日の朝明るくなるころには、すべて12旅団の部隊は福島県に入って活動しておりました。12旅団というのは空中機動旅団というふうに呼ばれておりまして、ヘリコプターをたくさん持っております。そういう観点もあって非常に動きが速い。旅団長も明け方にはヘリコプターで郡山の指揮所の方に飛んでいってしまいました。群馬県から福島まで普通ですと今まで5~6時間掛けて移動していたんですが、3月19日に北関東自動車道という道路開通直前でした。まさにこの震災のためにできたんじゃないかなと言うぐらいいいタイミングでした。開通前でしたが緊急車両を通してくれたので、3時間で展開することができました。

まず12旅団の活動、続いて48連隊の活動についてご紹介をしたいと思います。先ほど須藤さんが色々お話がありましたので重複するところは割愛しながら進めていきたいと思っております。

じゃ、スライドお願いします。

これは給食支援やっているところで、先ほど紹介がありましたが、この後ろの写真に炊事車、野外炊事車という車両なんですけど、これは釜が4つついておりまして、約200人ぐらいの中隊と呼ばれる部隊に1個ずつ持っております。普段、訓練の際にここでご飯を炊いたり、おかずを作ったり、味噌汁を作ったりという訓練をいつもしていますので、こういう時にはすぐに支援ができる。普段の訓練が役に立つというような状況であります。

ハイ、次、お願いします。

これ給水支援です。これは水トレーナーで水を配る。この写真はそれだけのことであります。省略いたします。はい。この写真はですね、福島県原発の近くの病院にいらっしゃる方を福島市内の病院に運んでいるところです。病院のお医者さんと自衛隊の衛

生科の隊員が共同しまして、自衛隊の救急車に乗せて運ぶ。

ハイ、次、お願いします。

先ほど申しましたようにヘリコプターをたくさん持っておりますので、これはCH-47という大型ヘリコプターなんですけど、これに患者さんに乗せて福島市内の病院に運ぶというようなこともやっておりました。震災の始めの頃ですね。その他原発の近くの介護施設等にいらっしゃる方を自衛隊の大型バスとかに乗っていただいて避難を支援するという事もやっておりました。

ハイ、次、お願いします。

これは救援物資の輸送です。先ほど海上自衛隊、航空自衛隊と協力して運びましたよというお話がありましたが、その写真です。これは福島の港に着いた海上自衛隊の輸送艦から荷物運び出しているところです。はい。これは福島空港に航空自衛隊の輸送機で着いた救援物資を運んでいるところです。はい。これは飯舘村の避難所なんですけど、原発の放射線の影響で水が汚染されているということで、ミネラルウォーターのペットボトルを運び込んでいるところです。

ハイ、次、お願いします。

これはガソリンを運んでいるところです。先ほど須藤さんのお話で自衛隊で備蓄しているガソリン、燃料を警察とかに給油したお話がありましたが、そういう輸送もやりました。その他ですね、当時ガソリンが非常に不足して、皆さんガソリンスタンドに長蛇の列をつくった経験をお持ちの方いらっしゃると思うんですが、福島県内でもガソリンが不足をしておりました。逐次、民間の業者が運んできてくれるんですが、福島市まではタンクローリーできてくれます。その先いわき市あたりはあまり原発の心配はないんですが、いわき市と聞いただけで、「行かないよ」と運転手が行ってくれない。そういう民間の燃料を運ぶ車も自衛隊の隊員が運転をして運ぶというようなこともやっておりました。

ハイ、次、お願いします。

これは白い防護服を着て民家を訪れている写真です。原発の近くの計画的避難区域あるいは緊急時避難区域ここに残っている方がけっこういらっしゃるんですね。原発が急変したときに、自力で避難できる方はいいんですが、自力で避難できない方、だいたい200名から300名ぐらいいらっしゃるんですが、その方達の避難を支援するために一件一件まわって、何処にどういう方が住んでいるかということ把握をしてみました。

一回把握したら終わりということではなくて、一回避難した方が次の日また戻って来たり、昨日いた方がまた避難して不在になっているということもありますので、毎日行って一軒一軒廻っておりました

また、その2~300人の避難の支援しなければいけない方を、どの車でどこまで運んでどのヘリポートからヘリコプターでどこに運ぶというところまで、常に最新の計画を作って待機をしておりました。

ハイ、次、をお願いします。

これは非常に整然と行列を作っている写真ですが、さすが日本人ですね。この行列の一番最先端には自衛隊のテントがあります。その中にはお風呂があります。先程お風呂の中の写真がありましたが、野外入浴セット、これは旅団で二つ持っております。12

旅団だけではなくて全国から集まってきておりますので各師団旅団がこういうものを持ち寄って入浴支援をしたのですけれども、このようにかなりの数の方が並んで、これを利用しておられました。

ハイ、次、をお願いします。

これは群馬県の右側に草津温泉という幟が立っているのですが、気分を出すために草津温泉というのを立てているわけではないんです。12旅団は群馬県にありまして、群馬県は沢山温泉があるんですね。草津温泉とか伊香保温泉とか。そういうところの温泉の組合の方が、群馬の自衛隊が福島で活動しているんだったら手伝ってやろうじゃないかという事で、毎日日替わりで今日は草津温泉、明日は伊香保温泉、明後日は〇〇温泉ということで11屯のタンクローリーで温泉を運んできてくれて、この自衛隊が設置した野外入浴セットに、温泉を入れてくれていた。福島県にいる人は非常にラッキーで、毎日、居ながらにして草津温泉に入り、伊香保温泉に入ることができていた。こんな支援もしておりました。

ハイ、次、をお願いします。

これは音楽隊が演奏をしている写真です。米軍と違って、なかなか一緒になってやらないよ、という話が先程（須藤さんから）ありましたけれども、こういう演奏支援をしながら、中学校あるいは小学校のブラスバンド部の生徒さん達に音楽隊の隊員たちが指導したりと若干はふれあいながら活動しておりました。この12旅団の音楽隊は、福島県の避難所に行って演奏支援をしたり、福島県から群馬とか新潟に避難して来られている方の避難所に行って演奏支援したりと、週に3回から4回の演奏支援をしておりました。自衛隊の災害派遣では、人命救助とかが主体なのですが、演奏支援こんなことも被災された方を少しでも癒すということも、広い意味での災害派遣なのかなと思います。本当に色んな活動を12旅団もしておりました。

ここまでお話しすると、肝心要の人命救助とか行方不明の方の話はどうなんだということになりますけれども、私のおりました第48普通科連隊は、主として行方不明者の捜索を致しましたので、連隊の話と併せて、この行方不明者の捜索についてはお話をしたいと思います。

私のおりました第48普通科連隊というのは普通科連隊と言っても普通の連隊ではないんです。普通の連隊ではないというのはどういうことか申しますと先程一寸須藤さんから紹介がありましたが、即応予備自衛官の連隊なんです。

ハイ、次、をお願いします。

即応予備自衛官、あまり聞き慣れない言葉だと思うのですが、全国に8千人くらい即応予備自衛官という方がいらっしゃいます。これは、高校を出て自衛隊に入って2年なり4年なり任期を満了して退職をした方が、志願をして即応予備自衛官になっている訳です。この人達は、年間30日間訓練に参加しています。私のいた第48普通科連隊というのは、約100名の常備自衛官と約400名の即応予備自衛官で編成された部隊です。ですから、普段は100名くらいしかおりません。「しか」といっても多いことは多いのですが、訓練のとき、或いは今回のような有事のときには、即応予備自衛官が招集されて100名の隊員とあわせて連隊の編成をとって行動するという部隊でありました。もともとは、有事のときということで、戦争のときの防衛任務が主体だと思うので

すが、今回のような災害にも招集されることになっています。首都直下型の地震とか東海或いは東南海の地震のときには招集されるという計画はあったのですが、今回の東日本大震災は、それ以上の災害であったということで、3月16日には防衛大臣から招集命令が出ました。最初は被災地の東北の即応予備自衛官に招集命令がでて、すぐに被災地の東北6県の即応予備自衛官が派遣をされた訳ですけれども、今回は順繰りに、その後に関西の方の部隊、その後九州の部隊、それから北海道の部隊、そして、私のところが最後の最後に4月の20日頃からということで、かなり落ち着いた時期になってしまったのですけれども、招集されました。

ハイ、次、お願いします。

防衛大臣から招集命令が出ます。戦時中だったら召集令状というところでしょうか。招集命令は郵送でも良いことになっているんですが、今回は初めてということもあって、一人一人会社とか自宅とかに地方協力本部の担当者が出向いてですね、招集命令を手渡しました。

ハイ、次、お願いします。

これは群馬の新聞なんですけれども、結構地元では注目をされて、即応予備自衛官に招集命令が出たというようなことで、新聞の記事にもなりました。

ハイ、次、お願いします。

これはNHKのテレビにでたのですが、即応予備自衛官が280名招集されました。私の第48連隊は、400名の即応予備自衛官がいるんですが、その約7割の人が出てきてくれました。この7割という数が多いのか少ないのかというのは、いろいろと議論のあるところなんですけれども、よく7割来てくれたなあと思っています。4月の20日から29日までの10日間出てきてくれました。もちろん普段は会社勤めしている訳ですから、会社を10日間休んできてくれた。会社によっては頑張って行ってこいよと背中を押してもらってきた隊員もおりましたし、会社に内緒で仮病を使って10日間休んできてくれた人もいました。こんなときのためにずうっと年間30日の訓練をしてきた訳ですから、今回この災害派遣に参加できなかったら何のために今までやって来たか判らんということで、臆になってもいいから参加しますと行って来てくれた即応予備自衛官もいました。そして、派遣が終わって、どうなったかと聞いたら、本当に臆になりましたという笑えない話もありましたけれども、そのくらい現職の常備自衛官と同じか、それ以上の気持ちでできてくれたのかなあと思って、私は感激しておりました。

ハイ、次、お願いします。

4月の20日に280名の即応予備自衛官が群馬に集まりまして常備自衛官と併せて約400名弱の編成をとって出陣式をやりました。

ハイ、次、お願いします。

これは現職だった頃の私の写真なのですが、これもNHKの全国放送で紹介されました。少しは即応予備自衛官というのは世の中の方に知っていただけたかなあ。よかったなあと思いました。

ハイ、次、お願いします。

何故か、群馬の地元の方が大勢見送りに来てくれて、これはしっかりやらなければならないなあと群馬を出発して、福島に向かいました。

ハイ、次、お願いします。

こんな感じのテントを張りました。福島は福島駐屯地の近くに射撃場があるんですけども、そこにテントを張って寝泊まりしました。自衛隊は、よく自己完結性がある組織だと言われますけれども、どこに行っても、自分達で寝るところを準備して、自分達で拠点を構えて行動できる。勿論、ごはんを食べるのも、自分達で準備できる。福島まで移動する間、高速道路を通っていくのですけれども、サービスエリアに立ち寄ります。そうすると、サービスエリアのガソリンスタンドには、警察と消防の車が長蛇の列を作ってガソリンを入れているんですね。警察と消防も、全国から東北地方に派遣をされてきていますので、彼らは途中で燃料を入れないと辿り着かないので、燃料を入れているのですけれども、自衛隊は、絶対にサービスエリアで給油、ガソリンスタンドに並ぶということはありません。燃料は、自分達でトラックに積んで持って行って、自分達で給油しています。これも一つの自己完結性かなと思います。こういう組織なんだと、御理解いただければありがたいと思っています。

ハイ、次、お願いします。

これは、先程も須藤さんの話は何回も出てきた瓦礫を除去している写真です。このように手作業で瓦礫を除去するというか、瓦礫の下に行方不明の人が居ないかを探していく。重機で片付ければ簡単なのですけれども、それでは捜索にならないということで、手作業でやっておりました。

ハイ、次、お願いします。

これは家の軒下。こういったところも探しておりました。

ハイ、次、お願いします。

これは南相馬市の被災地の全景なんですけど、遠くに見えるのは海です。その手前が、津波で物が何にもなくなってしまった地域なんですけど、これは4月の20日頃なので、所々地面が見えています。最初の頃は、地面が少し低くなったのだと思うのですけれども、津波が来て完全に水没をして、とても捜索できる状況ではありませんでした。1ヶ月くらいポンプで排水を続けて漸くこのくらいの地面が出てきて、まだ水は残っているところはあるのですけれども何とか入って捜索できるという状況になっておりました。

ハイ、次、お願いします。

こんな形で水の中は先程須藤さんから紹介がありましたが、胴長靴といって釣具屋さんで売っている腰までの長靴を履いて捜索をしました。

ハイ、次、お願いします。

こんな所、結構深いところですが、こういうところも捜索しておりました。用水路の中も捜索しております。これも同じ写真ですね。

ハイ、次、お願いします。

これは海岸付近のテトラポットの付近の捜索なのですが、津波で一回流されて、引き潮でまた海の方に瓦礫も或いは人も流されていったのですけれども、このテトラポットのところに引っかかっているということもありますので、この辺を捜索しておりました。

ハイ、次、お願いします。

同じくテトラポットの捜索ですが一寸波が高かったり潮が満ちてくるとかなり危険な状態で捜索しておりました。今も余震は続いていますけれども、このころ余震が頻繁

に起きていました。また津波が来たら捜索している隊員は全部流されてしまうということで、高台で地震速報を聞きながら、いざというときには警報を鳴らしてどこに集まってどういう方向に待避するよと計画を策定しながら捜索を続けていました。

ハイ、次、お願いします。

行方不明者を発見、現実にはご遺体を発見している所なんです、真ん中にあるのは警察の方です。携帯電話で警察の方を呼んで確認をしてもらって警察に引き渡す。私が行ったときには4月の下旬でしたのでそんなに沢山ご遺体を発見する機会はなかったのですが、岩手の方ではかなり多くて1日に何百体ものご遺体を発見してとても警察とか自治体では間に合わずに自衛隊がご遺体を搬送して埋葬するまでをやったという話を聞きますけれども福島県ではそういうことはありませんでした。

ハイ、次、お願いします。

現場にいる中隊長等が線香を持っていまして、線香をお供えして全員で合掌してそれからご遺体を運ぶというようなことを繰り返しておりました。

ハイ、次、お願いします。

これは何をやっている写真かという、丁度捜索地域からグローブが出てきたのでグローブを渡しているところなんです。思い出の品を集めましょうということで、道路脇に例えば位牌であったり、アルバムであったり、或いは子供さんの人形であったり、名前の貼り付けてある体操着であったり、このような物があると思い出の品ということで道路脇に固めて置いておく。そうすると市の担当の方が回収してくれるということをやっていました。何が思い出の品なのか。位牌やアルバムという話はしていますけれども具体的に何ということはないのですけれども、隊員が自分がもし家族だったらこういう物は思い出の品だよねという自分の基準で、それぞれ考えながら集めてくれたのかなあと思います。

また、思い出の品とは別に貴重品も出てくるんですね。貯金通帳とか結構沢山札束が入った財布とかも出てきました。こういうものは道路脇に集めておくという訳にはいきませんので、毎日部隊毎回収をして警察に届けていました。その中で意外と貴重品が多かったのは金庫なんです。一人では持ち上がらないくらいのこのくらいの金庫が一杯出てくるんですね。1日に10個くらい出てくるんです。それをトラックに積んで警察に持っていくと、じゃあそれは倉庫に入れておいてくださいということで警察の倉庫に入れるんですが、警察の倉庫に金庫が山のように積んである訳です。自分の家には金庫がないものですから、まあ入れるものもないのですけれども、この辺の方は金庫を沢山持っているんだなあと思議な感じで見ておりました。

ハイ、次、お願いします。

原発の20k圏内ではこのような白い防護服を着ながら瓦礫を片付けたりしておりました。

ハイ、次、お願いします。

これはゴミを集めているところなんです、元々任務は行方不明者の捜索なのではじめは瓦礫を片付けるのは任務ではないということでやっていました。瓦礫の下に行方不明の方又はご遺体があるかもしれない。だから、瓦礫をはがして一つ一つ下を見ていくということでやっていました。ですから捜索が終わると瓦礫が山のようにまた残ってい

る訳ですね。そうすると先程の須藤さんの話にもありましたように、ご家族の方もまだ自分の家族がその下に居るのではないかということで、なかなか気持ちの整理がつかない。我々は自治体の方から、此処は南相馬市ですので南相馬市とかその中の区からここを捜索してくださいといわれて捜索をしていますので、その自治体の方からもう結構ですといわれないと捜索を終われないんです。1回全部捜索を終わっても、もう少し探してくださいといわれるとまた捜索をする。私のところでも10日間に同じところを3回位捜索して居るんですけども、多い部隊ではもう何10回でも同じところを捜索したというところもありました。そこでですね、やっぱり瓦礫を片付けないと、少しきれいにしないといけないということで瓦礫を手で集めて、或いは重機で除けてきれいにしていくようになりました。4月の中旬以降だったと思いますけれどもね。そうすると自衛隊は面白いもので競い合ってきれいにし始めるんですね。

ハイ、次、お願いします。

最初はかなり瓦礫が散乱したところなんです。

ハイ、次、お願いします。

このようにきれいにしちゃう訳ですよ。東北方面総監からは5分刈りになるくらいにきれいにしなさいといわれて一生懸命きれいにしたのですけれども、こういう風になると家族の方ももうここには家族はいないなあとということで気持ちの整理がついて自治体の方からこの地域は結構ですということになりました。隊員の中には自分達はゴミ拾いに来ているのかと疑問を持つ隊員もいました。自分達は人命救助や行方不明者の捜索に来ているのに、毎日毎日ゴミを拾っている訳ですね。そういうときに私が言ったのは、やっぱり瓦礫が一杯山のように溜まっていると、非常に悲惨な被災地の景色なんですけれども、きれいに瓦礫を除けてきれいになった景色を見ると、それだけでどうなるものでもないんでしょうけども、何となく復興に向けて少し歩み出していけそうな景色になったかなあという感じがします。瓦礫を除去する、ゴミを拾う、こういうことの少しは被災された方の背中を押すことになるんだよというようなことを隊員に言いながら作業をしておりました。

ハイ、次、お願いします。これは被災地にいる犬だったんですが、非常に寂しそうな犬だったので写真を撮りました。ただそれだけです。

ハイ、次、お願いします。

4月の下旬になるとですね、何もなくなってしまった、この津波に洗われた被災地でもこうやってやっぱり花が咲くんだなあ、自然は強いなあという感じがしておりました。

自衛隊10万人が派遣をされたという話が、10万人という数は報道でも随分取り上げられ、陸海空自衛隊の約半分の数だといわれています。じゃあ残りの半分は何をしていたんだろうという話になるかと思うのですが、残りの半分は派遣しないでそれぞれの地域にいななければいけないんです。

ハイ、次、お願いします。

5月の9日から10日に栃木県で山火事がありまして、これも12旅団が派遣をされています。残っていた部隊がこれに参加をして山火事の消火に当たっています。東北で大きな災害がありましたけれども、全国各地いつ何が起こるか判らないということで常

に残った部隊は自分の地元で災害があったら対応できるように待機をしておりました。私の部隊は即応予備自衛官が招集された期間だけ現地に行っていましたので、それ以外はずうっと群馬で留守番をしておりました。ずうっと留守番をしていると被災地に行かなくていいねえというような感じでみられることもあったのですが、いやいや被災地に行った方がよっぽどいいよといたくなるくらいでした。ほんの僅かな人数で4県に対応することができるよう準備をして、ずうっと待機をしていました。被災地に行っている隊員と同じように隊員は全部駐屯地に寝泊まりしてこの3ヶ月間待機をしていたというのが実態であります。これは12旅団だけではなくて全国の北海道から九州までこの部隊も残ったものはそういう態勢をとっていたということを御理解いただけたらいいなあとと思っています。また、自衛隊の任務は災害派遣だけではないんですね。本来は防衛任務です。自衛隊の10万人が東北に集結している間、留守になっている地域で何があるか判らないよということで、防衛警備に関してもしっかり態勢をとっております。この間災害派遣で3月から大体4ヶ月一杯部隊が派遣された訳ですけれども、この間訓練をしなくていいのかといいますとそういう訳にはいきません。自衛隊は日頃訓練ばかりしていて何をやっているのかなあとと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、自衛隊の訓練というのはずうっと続けていなければいけないんですね。しかも、災害派遣の訓練ではなくて、戦闘行動・防衛任務に直結する訓練をしていかなければいけない。訓練をずっと継続して何とかそのレベルを維持できる。例えばプロ野球の選手は非常に野球がうまいんですけれども、彼らは練習をしなかったらすぐ下手になっちゃう訳ですね。毎日毎日練習してうまい技術を維持している。それと同じように自衛隊も常に訓練していなければいけない。しかも、災害派遣の訓練ではなくて、戦闘行動の訓練をやっているからこそ、こういう災害派遣にもすぐに対応できたということを御理解いただけたらありがたいなあとと思います。

ハイ、次、お願いします。

これでもう大体私の話は終わりです。今日は制服組ではなくて背広組の須藤さんが迷彩服を着て喋っていて、第一線に行っていた連隊の私が背広を着て喋っているという非常におかしな構図なんですけど、本当は12旅団の現職の部隊長がここに来て制服を着て或いは迷彩服を着てお話しするのが一番いいんだと思うんですけども、12旅団は今、旅団を上げて大きな訓練をやっています。3月から6月くらいまで災害派遣に全力で動いていましたので訓練があまりできませんでした。それを取り返す意味もあって旅団を上げて全部転地訓練といって、ある遠くの演習場に行って演習をしているのですが、その影響もあって、皆忙しくて今日のお話しにこれない。そこで第48連隊の連隊長はもうその頃退職して暇にしているだろう。どうせ仕事もないだろうということで私にお鉢が廻ってきて、今日お話しをしたという次第であります。非常にとりよめない話で申し訳ないのですが、以上で終わらせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

(館内拍手)

【司会】

山崎様どうもありがとうございました。皆様今一度盛大な拍手をお願いいたします。

(館内拍手)

【司会】

それでは質疑応答に入らせていただきます。本日の2人の御講演に関しまして御質問のある方は挙手をお願いいたします。係の者がお席までマイクをお持ちいたします。

【質問者1】

須藤さんに一つお聞きしたいと思います。先程のお話の中で自治体の縄張り意識がなかなか消えないというお話があったのですけれども、この災害派遣を通じて、自治体等にこうあって欲しいとか、こうあるべきだということがありましたら、教えていただきたいと思います。以上一点です。

【回答者(須藤)】

御質問ありがとうございます。講演の中でも述べましたが、平素の仕事のやり方、これを有事には変えて欲しいと思っています。困るのは、平素仕事ができる人、これが有事になると足手まといになるケースが多いのです。ここは難しいところで、逆に、平素は細部まで注意が行き渡らない、役所で言うところの「ザル」と呼ばれている人の方が、むしろ有事では、臨機応変の対応ができて活躍するのですね。とにかく有事になったら、情報もなければ、時間もありません。平素であれば慎重だと褒められるところが、有事では遅い対応で人命にも関ることになります。

また手前味噌になってしまいますが、いま自衛隊のOBが県庁や市の防災課などで再就職しているケースが多くなっていますが、やはり経験豊富なOBがいると、こういうときに自治体の核になって対応してくれると思います。また、平素から、有事の心構えを教えることもできます。いま都道府県レベルでは、ほぼすべての自治体に入っているのですが、市町村レベルになりますと、まだまだOBがいないところが多いので、これから市町村にも、OBの方が入っていただくと、危機管理能力が向上するのではないかと考えています。

【質問者1】

ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。外に質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。

【質問者2】

貴重な講話を、どうもありがとうございました。何点かお聞きしたいことがあるのですが、隊員の方々の震災を通じて活動したストレスとかそういう対策は何かされているのですか。PTSDとかそういう問題が多分あると思うのですけれども。

【回答者(須藤)】

現在、概ね各駐屯地に臨床心理士が1人おりまして、活動中もそうでしたが、活動が終わってからも、定期的に精神面で変化がないか、チェックをしています。

精神的な問題は難しいのですが、報道では、隊員が御遺体を見るから精神的に参ってしまう、だいたいそのようなトーンで書かれています。確かに、中にはそういう隊員もいるのですが、隊員によっては逆に遺体が見つからないから、遺体を見つけたからではありませんよ、遺体が見つからないから、ご家族の期待に応えられなかったと心に病んで、後まで引きずってしまったりするケースもあります。

それから、これは私も実際現場に行っても思ったのですが、どうしてもご家族の方に感情移入をしてしまうのです。私が印象的だったのは、石巻で水没したところを隊員が捜索していたときのことですが、御遺体が見つかったら、家族の方はホッとした表情をされるのです。ああ、やっと見つかったか、これで家に帰らせることができる、そういう感じです。ただ、それとほぼ同時に、がっかりした表情もされるのです。発災から時間も経っていますから、当然、行方不明になってしまった方はもう亡くなっていると頭では分かっているのでしょうけれど、それでも、心のどこかで、ひょっとして生きてくれるのではないかと、そうあって欲しい、本当にわずかかもしれないですが、その可能性を信じていたのだと思います。それが現実的に御遺体を見ることで、今述べたホッとした気持ちとがっかりした気持ち、その両方がほぼ同時に出てくるのだと思います。そういう姿を見ていると、私も胸が締め付けられるような思いになってしまいます。特に、お子さんの御遺体が見つかった場合には、私も2児の父親ですから、親御さんはどのような思いでお子さんを迎えるのだろうか。そのようなことを考えていると、いたたまれない思いになります。それで、実際に活動している隊員はどのような気持ちでいるのかと、気になってそちらの方を見ると、やはり隊員も泣きながら作業をしているのです。

メンタルケアの一環として、臨床心理士などから、現場では、ご家族に感情移入をしてはいけないですよ、感情移入してしまうと、自分たちも精神的に参ってしまいますよ、とは言われているのですが、実際に現場に出ていますと、なかなかそれは難しいものがあります。

また、山崎連隊長からも話がありましたけれども、今回の災害派遣では、人命救助や行方不明者の捜索に限らず、その一環として、例えばグローブや人形など、被災者が大切にしていたら物についても、丁寧に掘り出して、大事に保管しています。我々司令部も、物理的な面だけでなく、精神的な面での貴重品も大事にするよう指示を出しましたが、実際に、何が貴重で何が貴重でないかの判断は、やはり現場にいて、しかもご家族や被災者と同じ思いをしないとできるものではありません。つまり、感情移入しなければ、泥まみれの人形やおもちゃなどを、貴重品だとは感じることはできないと思うのです。東北の3月は真冬のように寒いですから、雪も降りますし、そういう中で、一見、泥まみれになってガラクタのようになってしまった物を、これは大事な物だと想像を働かせて、しっかり洗って保管する。これは現場でご家族や被災者と同じ思いをもっていればこそ、できることだと思っています。しかし、その代償として、つまり、優しい気持ちの代償として、精神的に負担がかかってしまうのです。それでも災害派遣中は気が張っていますので、また24時間、常に仲間と一緒にいますから、その負担を強く感じることはない。それが、災害派遣が終わって、少し落ち着きますと、強いストレス

として感じられるようになるわけです。

隊員は皆まじめですから、大怪我をしたのであればともかく、元気が出ないからというだけで、仕事を休むことには強い抵抗感があります。また、自分が元気を出さなければ、組織に迷惑をかけてしまうと、どうしても無理をしてしまいます。しかし、隊員の優しい気持ちがあったからこそ、今回の災害派遣では、指揮官の「すべては被災者のために」という指示が徹底できたのですから。同じく、その優しい気持ちゆえに、精神的に不調になる、元気が出ない。そういう隊員を、組織として決して見捨てるようなことがあってはならない。むしろ、感謝の思いをもって、しっかりとサポートしていきたいと思っています。そのために、現場レベルでは、冒頭に述べましたように、臨床心理士を中心に、定期的に隊員の精神面をしっかりとチェックしていますし、今後もこれを続けていきます。また、防衛省全体としても、副大臣のところで検討会を立ち上げまして、万全の態勢でサポートしようとしています。

【質問者 2】

あと、もう一点だけいいですか。今回の震災で東北地方なので多分寒いと思うんですけども隊員の方寒さ対策とか夏場なんかは暑さが酷いと思うんですけども、そういう対策とかは何かされているんですか。

【回答者（山崎）】

ちょうど私が行った頃は暑くなりかけだったものですから、特に原発の近くで防護服を着て歩くということは非常に暑くてですね、熱中症の危険もあるよというような時期もありました。そこは搜索の時間を短くするという様なことで対応しておりました。やっぱり防護服を着ないで行くというわけにはいきませんので。以上です。

【質問者 2】

すいません。どうもありがとうございました。

【司会者】

そろそろお時間となりますが、あと一問だけ質問を賜りたいと思います。

【質問者 3】

普段私ども本当に外部からのみですね。自衛隊の活動をあまり知るチャンスはないのですけれども、今日は一命の方々が本当に懸命に働いたということが知れまして、大変感激いたしました。一つ山崎一等陸佐にお伺いしたいんですけども先程の話で自衛隊は三宅沖の地震、これに対してはかなり綿密な計画と対策を為しておられる。多分津波はですね、そこまで計画はなかったんじゃないかと思うんですね。ところが言われてますと数時間以内に出動して、しかも山崎連隊長の場合には、一応民間人に戻った元自衛官ですかね。この方々をどのようにしてあれだけ掌握してですね、立派な任務を果たされたのか。心身共に色んな方法で鼓舞し、慰め、また誇りを沸き立たせたのではないかと思うのですけれども、そういうところの裏話を、もしよろしければお漏らしいただけ

たらと思います。以上です。

【回答者（山崎）】

私の連隊は400名の即応予備自衛官がいるんですが、この即応予備自衛官というのは普段から一緒に訓練しているんです。予備自衛官が招集されてから連隊に配属されて編成を取るというのではなくて、普段から自分の隊員としてずっとつきあっていますし、年間30日の訓練も一緒に汗を流しています。連隊ができて丁度10年間になるんですけども、10年間やってきた成果で仲間意識が非常に強かったのかなと思います。さっき冗談みたいな話で馘になっても行くんだと言ってくれた者もいるんだという話もしましたけれども、今回行かなかったら何のために今まで訓練してきたのか、本当にみんなそういう気持ちで来てくれました。実は3月11日の夜にどのくらいの者が招集に応じてくれるか意思確認をせよと連絡がありまして、携帯電話がなかなか通じなかったのですが、携帯とかメールとか電話とかで400名全員に連絡をとりました。もし派遣があったら来られるかということを確認しました。そのときも大体8割くらいの方は何とか都合をつけて行くよと言ってくれましたし、その後4月の下旬まで招集はなかったのですが、私の部隊はですね、もう毎日のようにいつ招集がかかるのか、いつだ、いつだ、ともう正直嫌になるくらい毎日向こうから電話がかかってくる。そのくらい皆その気になって来てくれました。ですから、今回の災害に関して、彼らを鼓舞する必要性は実のところ殆どなくて、彼らがその気になって集まってきてくれたというのが実態でありました。以上です。

【質問者3】

はい。どうもありがとうございました。

【司会】

どうもありがとうございました。お時間がまいりましたので、これで質疑応答を終了させていただきます。須藤政策補佐官、山崎元一等陸佐ありがとうございました。皆様、今一度盛大な拍手をお願いいたします。

（館内拍手）

以上をもちまして、第20回防衛セミナーの全てのプログラムを終了いたしました。本日はお忙しい中ご来場いただきましてありがとうございました。お忘れ物がないようご注意ください。

本日は誠にありがとうございました。